（昭和22年5月16日第三種郵便物認可）

明大闘争の意義と方針

本学の砦死守戦に勝利

六項目要求＝改良主義路線と対決

一部商学部闘争委員会

八月三日の大学治安立法強行採決は、支配者階級の側からする十一月決戦の開始の宣言であった。帝国主義の危機は、沖縄をめぐり、もはやいかなる形でもってもおさえることのできない所にまできている。にもかかわらず、強行採決の政治的意味をとらえず、痴呆症的無対応に陥っている中で、商闘委は、文部省突入の実力の反撃をおこない、明大全共闘の先頭にたって闘い抜いてきた。われわれは、今こそ全面的総括と、今後の方針を提起する。

①革命か改良か

まず第一に明らかにしておかねばならぬことは、われわれの闘争が、「六項目要求＝改良主義路線との対決を通じて勝ち取られたものだということである。

大学治安立法粉砕の闘いが、個別学園内諸課題（改良問題）から政治闘争へということ、だが東大闘争の形態をのみ類推し位置づけ、「六項目」として集約されたものを闘えばよいという一部の度し難い改良主義者は、四・二八闘争以後的情勢の急展開と、大学治安立法が、なぜ、大学の国家権力による直接支配としてかけられて来ているのかについて把握できない所に原因があり、破防法適用に恐怖し、学内改良主義的召還路線に転落したのだ。そのことは、組織論においても＝全共闘→学内改良闘争、安保闘委→政治闘争なるプラグマティクな二元論的組織論＝、みじめな破産ぶりを示すのである。

こうした中で大学治安立法粉砕を安保闘争として闘い抜き、権力との直接的対決への無期限バリケードストを提起し、個別諸課題の勝利も、政治闘争の勝利なくしてありえないことを明確化し、各クラスでの反対決議、スト権確立、闘争委結成を訴えていった。また、クラス決議すら満足にでぬ間に、全共闘（準）が作られるということに対し、われわれはクラス決議、クラ闘委、各学部闘争委を結成し、各地区共闘会議、全学共闘会議結成を打ち出し、全共闘（準）との路線的・組織論的な闘いを全面的に貫徹する中から、十七日学生大会を六項目要求のストではなく、大学立法粉砕／明大闘争勝利＝というスローガンに押し上げ、全共闘を勝ち取って来たのである。

改良主義者のかかる誤ちは、結議的には、（1）東大闘争の切開いた地平と（2）四・二八沖縄奪還大闘争の切開いた地平とその後の情勢（三）すなわち破防法に対する闘いと破防法体制下におけるわれわれの闘いがいかにあるべきかという点に関する、無知と混乱なのである。

②第二次大学闘争の意義

それは、今日、大学闘争が安保闘争の質を内包して展開されて来ているということに留らず、大学闘争それ自体が、安保粉砕を中心課題とする日本階級闘争の有機的構成部分に転化しており、大学闘争の発展が、七〇年闘争の発展を規定するような直接的関係を成立させんとしていたことである。この客観的根拠は敵階級の攻撃の方向、つまり、七〇年問題の「治安問題」化にあり、この主体的根拠は「大学を安保粉砕・日帝打倒の砦に」というスローガンとその具体的貫徹にあるのである。

③大学治安立法闘争の性格と新たな情勢の惹起

今日の大学闘争が、かかる位置を持っており、そのことが「日本の核武装・参戦国化＝政策＝具体的には、「全土侵略基地化・政治的臨戦体制化」――という日帝の路線に大打撃を与えている。ベトナムにおける米軍の敗退と、それによってますます深化するアジア危機、同時にそれによって加速化され、さらにIMF体制の崩壊的危機によって、従来の予想をこえる形で激化しつつある国際帝国主義の危機これらによって日帝の危機は、日米同盟強化を第一命令とし、自らの救済を配の脆弱性を一挙的反動化として遂げねばならぬものとして迫られており、破防法、出管法、大学立法はその具体的あらわれである。勝利的に打ち抜かれたわれわれの闘いは、だがしかし、八・三強行採決という形をとって、帝国主義者は自ら議会民主主義すら右から破壊し一挙的に力関係を変え、自らの危機を乗り切る決意をはっきり宣言すると共に、十一月佐藤訪米で沖縄協定を結び、実質的安保大改訂を行なうための先制攻撃をかけてきた。これに対し、わずかに二度にわたる文部省突入闘争で一矢をむくいたにすぎず、十一月決戦は敵階級の側から募を切っておとされたという事態の中で、敵階級の危機の深まりの遠さとわれわれの一定の遅れを深刻に見て取らねばならない。そして、その実施に対しては、広島大学全共闘が、その断呼たる反撃を組織し佐藤内閣のなみなみならぬ決意を第一歩で粉砕し、その野望に重大な打撃を与えたのである。広大全共闘は、全大学に具体的・実践的指針を自らの闘いを通してノロシをあげた。十一月決戦の火ぶたは切られたのだ。

④明大を第二の広大に

われわれは、今、明大のバリケードを強化拡大し、砦死守の闘いの態勢を確立することである。こうした時、ブンド・ML派の党派利害のために八・三全明全共闘結成を流産させてしまった犯罪性を弾劾すると共に、われわれは、ブンド・MLの諸君に結成のための共同の努力を訴える。明大の砦死守戦に勝利し、十一月決戦を勝利として闘い抜くことこそがわれわれの任務である。

広島大学へ続け！

我々の意識と決意は鮮明である。

互井賢二（商学部四年）